

序言

本ディスカッション・ペーパー『装いと規範5——グローバルな文脈の中の日本』(CIRAS Discussion Paper No.105、京都大学東南アジア地域研究研究所、2022年)は、ワークショップ「装いと規範」第5回(2021年8月20日、オンライン開催)の記録を基にしたものである。このワークショップは、新学術領域研究(領域提案型)「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて——関係性中心の融合型人文社会科学の確立」(「グローバル関係学」、領域代表:酒井啓子、千葉大学)の計画研究B01「規範とアイデンティティ——社会的紐帯とナショナリズムの間」(研究代表者:酒井啓子)主催、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)の共催により実施された。

今回で5回目を迎えた「装いと規範」ワークショップは2018年より毎年開催してきたものである。現代世界におけるヴェールなどイスラーム的装いの多様性への関心からスタートし、初回の研究会は、報告者もコメンテーターもイスラーム圏を研究対象とする研究者であった。しかし回を重ねるにしたがって、日本のキモノ、アジアの学生服、複数地域の民族衣装というように、地域も関心も大きく広がっていった。当初に設定し、参加者の間で共有されてきたのは、「装いは、価値観や信念、思想、規範など、目には見えないものを映し出す鏡である。その時々々のファッション(流行の装い)に目を向けたとき、我々は、それぞれの時代、それぞれの社会における人々が、どのような美意識を持ち、何を大切にしていたのか、そして、どのような枠組みの中に生きていたのか、その一端を知ることができる」という視座である。また、「装い」を衣服・衣装に限定せず、素材・装飾品・化粧・髪型なども含むものと広くとらえてきた。各回のワークショップでは、世界各地の事例の多角的検討を通じて、装いから何が見えてくるのかを探る試みを続けてきた。その中で、装いにおいて「現代」「国家」「イデオロギー」がどのような意味をもち、「ローカル」「ナショナル」「グローバル」がどのように接合され、あるいは組み直されているのか、そこにどのような新しい価値が生み出されているのかといった問いがより明確に、参加メンバーの間で共有されるようになってきた。

過去の第1回～第4回の開催報告、ならびにそれぞれの成果として刊行したディスカッション・ペーパーについては以下をご参照いただきたい。

●第1回(2018年2月10日、京都大学にて開催)

開催報告: <http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20180603.html>

ディスカッション・ペーパー: 帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範——現代におけるムスリム女性の選択とその行方』(CIRAS Discussion Paper No.80、京都大学東南アジア地域研究研究所、2018年) <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/234695>

● **第2回** (2019年2月9日、京都大学にて開催)

開催報告：<http://www.shd.chiba-u.jp/glbcrss/activities/activities20190113.html#article>

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範2——更新される伝統とその継承』(CIRAS Discussion Paper No. 85、京都大学東南アジア地域研究研究所、2019年)<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/244062>

● **第3回** (2020年2月10日、京都大学にて開催)

開催報告：<http://www.shd.chiba-u.jp/glbcrss/activities/activities20200128.html#article>

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範3——「伝統」と「ナショナル」を問い直す』(CIRAS Discussion Paper No. 95、京都大学東南アジア地域研究研究所、2020年) <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/252447>

● **第4回** (2021年2月6日、オンラインにて開催)

開催報告：<http://www.shd.chiba-u.jp/glbcrss/activities/activities20210107.html#article>

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範4——「価値」が生まれるとき』(CIRAS Discussion Paper No. 102、京都大学東南アジア地域研究研究所、2021年)<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/263240>

2021年度は、従来よりも開催時期を早め、夏季にワークショップを実施した。報告者として杉浦未樹(法政大学経済学部)、森理恵(日本女子大学家政学部)、安城寿子(阪南大学流通学部)の3氏を迎え、コメンテーターは後藤絵美(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、杉本星子(京都文教大学総合社会学部)、小形道正(京都服飾文化研究財団)の3氏、総合司会は帯谷知可(京都大学東南アジア地域研究研究所)が務めた。当日のプログラムは本書41ページに掲載している。

第1報告、杉浦未樹氏による「戦間期アフリカにおける日本製シャツの位置付け」は、1920～1940年代にかけて日本がアフリカへの最大の衣類輸出国であったことをあらためて指摘しつつ、東アフリカの事例を取り上げている。現地でのニーズを輸出戦略として考慮した上で生産された日本製品が現地で広く受け入れられ、「植民者たち」が持ち込んだ洋装とも現地の従来の装いとも異なる独自のカテゴリーの衣服へと発展した経緯を実証的に描き出し、日本製品が新しい価値を提供したことを論じている。

第2報告は、本ワークショップ2度目の登壇となる森理恵氏による「総動員体制下における『モンペ』の普及——思潮・文化としてのファシズムから考える」である。文化史的なアプローチとして「ファシズム」をより広く緩やかにとらえ、アメリカの帝国主義との共通点も念頭に置きながら、戦時下における日本の婦人標準服として「発明」されたモンペについて、女性動員の装置、階級を問わない労働着、農山村賛美と民族主義が結びつい

た美意識が反映された装いという異なる側面を照射している。

第3報告、安城寿子氏による「異国趣味の残像——コムデギャルソン(川久保玲)の初期コレクションはどう語られてきたか」は、ファッションデザイナーの歴史が語られる際、しばしば安直なステレオタイプが先行する危険性を指摘しつつ、史料実証に基づきデザイナーが成功に至る複雑な経緯を明らかにする。そのような立場から、川久保玲とコムデギャルソンが世界的な評価を確立していく過程を「パリ進出前後の川久保の自己表象」、「説明困難なものを説明するために行われる異国趣味化」、「ファッション雑誌の図像に見る異国趣味化」、「歴史言説の中で再び異国趣味化される川久保の初期コレクション」の4つの側面から分析し、複数のイメージと眼差しの交錯を示した。

続くコメントとディスカッションでは、美意識や流行が形作られるプロセスに着目する重要性、植民地主義・近代性・ナショナリズム・プロパガンダと装いの複雑な関係、装いとグローバル・ヒストリーとの接点など、多くの論点が見出された。毎回のことながら、時間不足が残念であった。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、4回目の緊急事態宣言が出される状況下、ワークショップは前回に引き続きZoomによるオンライン開催となったが、事前登録者39名、ワークショップ中には常時30名前後の参加が確認できた。制限がある中でも、実りある議論ができたことはたいへん幸いであった。

本ディスカッション・ペーパーは、新学術領域研究(領域提案型)「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて——関係性中心の融合型人文社会科学の確立」(「グローバル関係学」、領域代表:酒井啓子、千葉大学法政経学部教授、研究課題/領域番号1801)計画研究B01「規範とアイデンティティ——社会的紐帯とナショナリズムの間」(研究代表者:酒井啓子、研究課題/領域番号16H06549)の研究成果の一部であり、刊行にあたっては京都大学東南アジア地域研究研究所CIRASセンターの助成を受けた。

なお、2021年度、これまでのワークショップの成果をもとに、以下の英文論文集を別途刊行する運びとなった。オープンアクセス化も予定されており、合わせてご覧いただければ幸甚である。

Emi Goto and Chika Obiya, eds., *Created and Contested: Norms, Traditions, and Values in Contemporary Asian Fashion* (MEIS-NIHU no.5/ SCI-115), Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2022.

2022年3月

帯谷 知可・後藤 絵美